C−69 近世衣生活における着衣の変異動向——節用集類の内容分析を通してみた——

和洋女大文家政　永野順子

目的　16世紀末期より19世紀後半にいたる我が国の近世は，衣生活史の面では，和装文化の完成期とされている。その実体を着衣の面から明らかにし，なお近代に向ってどのように変異の動向を孕んでいたのかを剔出するのが本研究のねらいである。

方法　近世初期に刊行された易林本節用集(1597刊)はじめ，この時代に操作された節用集類のうちから代表的なもの初期3種，中期4種，後期3種，計10種を選び，これらに採録されている衣生活関係の事項に着眼し，一つ一つカードに作製した。節用集類は今日の百科事典に該当するものであるから，当時の衣生活の実体を把握するうえで重要な手がかりを与えてくれるものと期待したからである。こうして得た6188枚のカードのなかから着衣関係2508枚を抽出し，これを日常着・外出着・礼装着・職業服，上着・間着・下着・付属品などの項目に分類した。そして各節用集ごとに量的・質的検討をおこなうとともに，これらを年代順に配列し，いかなる着衣が増加し，また減少ないし消失しているかについて細かく調査し，着衣の時代的変異動向を把握するようにつとめた。なお，被服材料・染色文様をはじめ衣生活におけるさまざまの諸分野とも比較考量し，近世の着衣が総体としてもちえた諸特徴についても検討を怠たらなかったつもりである。

結果　以上の研究操作によって衣生活史のうえで興味ある結果が剔出できたのみならず，今日および将来の衣生活のあり方について，いくつかの重要な示唆が得られたので，ここにまとめて発表することとした。